

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 83 回 「モツレク」の、聖なる涙 ～ 阪神淡路大震災から 10 年

阪神淡路大震災の被災後 10 周年に当たる過日、被害者の冥福を改めて祈念するコンサートが、神戸の地（神戸文化ホール）で開催された。地元神戸の神戸市混声合唱団と NHK 交響楽団、指揮はウラディミール・アシュケナージ（Vladimir Ashkenazy） いわずと知れた世界的名ピアニスト兼 N 響の音楽監督である。曲目のメインは、WA. モーツァルト（Wolfgang Amadeus Mozart）の「死者のためのミサ曲」（Requiem）である。

テレビで放映したから、ご覧になった方いらっしゃると思うが、この演奏が、実に素晴らしかった。往々にしてこの曲は、フルオケ（フルオーケストラの略）フルコーラスをバックに、壮大なスケールと熱気が血走るほどのパワフルな演奏を競う傾向にある。

古くはブルーノ・ワルター、そして、ヘルベルト・フォン・カラヤン、さらに、レナード・バーンスタインしかり、重厚な音の渦に圧倒され、「怒りの日」のラッパや力強い合唱に驚愕される。小澤征爾、リッカルド・ムーティ、ヴァレリー・ゲルギエフはじめ、多くの現代を代表する指揮者は、おそらくこの傾向にあるとって過言でない。

しかし、この日の演奏は、全く違っていた。4 人のソリスト（歌）に加え、オケの編成は最小限のストリングス（弦楽合奏）と、（...クラリネットではなく...）2 本のバゼットホルン、ファゴット、トランペットと 3 本のトロンボーン、それにティンパニだけであった。

必要以上に力むことなく、真っ直ぐにモーツァルトと向かい合い、その敬虔^{はいげん}とも言うべき、祈りにも似た崇高な演奏は、聴衆の胸に深くしみこんでいった。近代的な大パノラマ演奏に慣れきっていた「モツレク」（モーツァルトのレクイエムの略）が、一滴^{ひとしずく}の涙を誘う「ミサ曲」であること、今、改めて、アシュケナージに教えて頂いた。実際、会場内では、あちらこちらで、涙を拭うシーンが見受けられた。そんな思いで身動きが取れない観衆は、拍手をすることすら、ためらったかも知れない程の、感動であったに違いない。

突然の地震で父母を亡くし、あるいは兄弟が逝ってしまった。犠牲者はもちろん、残された遺族の「涙」は、^か涸れることはない。10 年たとうが、20 年経過しようが、この、聖なる悲しみの涙を、永遠に伝えていかなければならない...モーツァルトが、静かに訴えかけてくれた。

久々に、いい演奏を聴けた至福な夜、ブランディーグラスでも傾けて休むとしようか...
（なんて、ちょっと、キザになったりして ... アーメン ）